

毎日がパラダイス 吉村達也

第5回 運命の神が動きはじめた

■ビル・ゲイツが決める詰棋界の未来
通巻五〇〇号がこんな時期にこよう
とは思ってもみませんでした。

いえ、もちろん一九九七年の十一月
にその記念すべきときがやってくるの
は、とつくの昔からわかっていたこと
ですが、五〇〇号の時点でコンピュータ
の解図能力がここまで進歩していよ
うとは、まったく予想外でした。

このままいくと、詰将棋界はあつと
いうまに激変の嵐に見舞われることは
間違いありません。

私が伊藤果氏と共著で出した『王様
殺人事件』をお持ちの方は、あの本の
巻末対談をもういちど読み返してみて
ください。あれが世に出たのは、わず

か一年前です。その時点で、私と伊藤
氏が語り合っているコンピュータの詰
将棋界への介入度の予測は、もう少し
ゆるやかなものでした。ところが、た

った一年経つか経たないうちに、あの
対談では仮説めいたニュアンスで語ら
れていたことが、完全に常識となつて
しまった。

それもこれも脊尾詰と森田将棋の進
歩のおかげ……いや、もつと大もとを
正せば、ウインドウズ95を作り上げた
ビル・ゲイツ以下マイクロソフト社の
スタッフのおかげでしょう。

つまり、数年前には詰キストの誰ひ
とりとして予測していなかったと思ひ
ますが、純粹に日本的な詰将棋の世界

が、詰将棋のツの字も知らないアメリ
カ人たちによって、その命運を大きく
変えられてしまったのです。

もはや詰パラ全題正解者を称えよう
にも、はたしてその人々がほんとうに
自力ですべてを解答しているかどうか
はわからなくなりました。仮に全題正
解者に大きな栄誉や賞品を懸けたとす
れば、人情として機械の力を借りたく
もなるでしょう。

しかし、詰パラ会員の中で日常生活
にコンピュータを必要としない方も、
まだ大勢いらつしやるはずです。そう
いう方にとって、詰将棋を解くだけの
ために大金をはたいてコンピュータと
詰将棋ソフトを購入するなんて、あま
りにも現実離れした行為になる。

またコンピュータを持つている人
で、メモリー増設の度合いによつては、
解けるものも解けないということもあ
る。当然、増設メモリーを買うのも、
それから進化したソフトに買い替える

のお金がかかります。

そうなる、今後は詰将棋の解答に
おいて、「持つ者」と「持たざる者」
のハンディがほんとうに大きくなつて
しまいます。

詰将棋なんて、紙と鉛筆があれば楽
しめるお金のかからない娯楽だったはずなのに、いつのまにかその最先端を
行くには、何十万という資金が必要に
なつてきてしまいました。

去年のいまごろでも、すでにバラヤ
将棋雑誌の全題正解者欄に名をつらね
ている人の中には、脊尾詰や森田将棋
に全面的に頼っていた人もまじつてい
たかもしれません。だけど、そのころ
はまだそれは少数派かもしれないな、
という予測があつた。

なぜならば、去年の時点では、たと
えばDOSIVで動く森田将棋のほう
は長編の解図能力はゼロ、中編でも合
駒選択の幅が広い飛角香が主役になる
と、二十手台ですらかなり難航しまし

た。だから、少なくとも長編の正解者
は自力だろうな、と想像できた。

ところが史上最長手数数のミクロコス
モスがコンピュータに征服されてしま
つたいま、詰バラの年間全作品正解と
いう偉業を成し遂げた、奇跡の解答王
七條兼三氏の再来を果たすが現れて
も、ほんとうに自力なのか、という色
眼鏡でみられてしまう事態は避けられ
ようありません。

それだけならまだしも、自力で解か
ないということは、作品の短評もぜん
ぜん本質を衝かないものになる。クイ
ズを解かずにクイズの出来映えを評価
しろといったって、できるはずがあり
ませんからね。

■楽園が蹂躪される日はもうすぐだ
さらには創作部門にも、コンピユー
タの威力は大変な力を発揮しつつあり
ます。それでも、いままで『手動モー
ド』で作ってきた人のコンピュータ利

用法は、ちゃんと人間の手が加わつて
いるという温かみがある。

いや、それもいまとなつては幻想な
のかも知れませんが、詰将棋歴もな
く三十年になる私などの場合は、コン
ピュータにフルオートマチックで詰将
棋創作を任せることに、どこか道義的
な疚しさを感じてしまう。これって、
クリエティブな創作活動と言えるの
だろうか、と……。

しかし、今後は『王様殺人事件』の
対談で伊藤果氏が予言をしていたよう
に、将棋をまったく知らない人が、詰
将棋を純粹なコンピュータゲームとし
てデザインしてくる時代が、現実問題
として出てくるでしょう。

そうなつたとき、手作りならではの
温かみや深み、さらには余詰不詰に泣
かされながら完成品に近づいていく創
作の苦勞と喜びは、もはや遠い過去の
物語となつてしまうかもしれません。
そして場合によっては、次のような

恐ろしい事態が発生する可能性もあります。いや、「可能性もあります」と書いた程度では、しよせんSF物語と思われてしまうので、もう少し脅しを含めて申し上げましょう。

次の物語は、きわめて高い確率で近い将来起こり得る大事件を描いたものです。どのような事件かと申しますと、たつたひとりのコンピュータの天才のために、なごやかな同好の士の集いの場であった詰将棋の世界が無残にも蹂躪されてしまう日がやってくる、という話。

私としては、二十一世紀を待たずして（つまり西暦二〇〇〇年の大晦日まで）この物語が現実になっても少しも驚きません。少なくとも、これに類したことはもう来年末に起きても不思議ではない。

ではお届けしましょう。シュミレーション物語（楽園が土足で踏みにじられる日）。

* * *

一九九八年の年の瀬も押し迫つたある日、大阪市北区天満の3の7の8にある第5田淵ビルの前に、郵便配達のパイクが停まった。

それが詰将棋界を震撼させる運命の郵便物とも知らず、配達員はかなり分厚いA4サイズのクラフト封筒を持って、二階にある詰将棋パラダイス編集部に通じる階段を駆け上がった。

受け取りに出た編集長の水上仁は、「配達証明付きの書留郵便なので印鑑をお願いします」という郵便局員の言葉に、なにか不吉な胸騒ぎを覚えた。

これまで詰将棋の楽園の世界で裁判ざたになるようなトラブルなど起きたためしがない。しかし、配達証明付きの速達書留という物々しさは、それがただの郵便物ではないことを物語っていた。しかも、その封筒の厚さは、週刊誌三冊分くらいはゆうにあつた。重さもずしりとした手ごたえである。

差出人の名前をみるが、水上にはまったく記憶がない。少なくとも詰将棋会員でないことは確かだ。

（まさか爆弾ではないだろうな）

不安に思いながらもういちど封筒の表を見ると、隅の方に「投稿作品中」と書いてある。

（投稿作が、こんなにたくさん？）

いちどに何十作も投稿してくる人がたまにはいるが、この重さがすべて投稿作品を記した紙だとすれば、その数たるや何十という単位ではすみそうにない。水上は、半信半疑で封筒を開けてみた。

いちばん上にパソコンを使ってプリントアウトした挨拶文があつた。

（前略、初めておたよりします。私は帝都大学理工学部講師の陣内竜堂と申します。ペンネームのようですが、これは本名です。）

まず最初に、このたび詰将棋パラダイスの会員として貴誌を購読いたしました

く、その手続きの方よろしくお願い申し上げます。とりあえず誌代五万円を振り込みました。それだけ入れておけば当分は大丈夫ですね。

さて、つぎに自己紹介を少々、私はこととして三十三歳になりますが、囲碁はたしなむものの将棋歴はゼロに等しい。駒の動かし方や基本ルールくらいは承知しておりますし、初手は76歩か26歩が妥当であろうという常識ぐらいは心得ておりますが、それ以上のことは何もわかりません。

ただしパズルとしての詰将棋には大いに興味があり、私の専門分野である人工知能の研究素材として、詰将棋を専門に解図および自動作図するコンピュータの開発に取り組んで参りました。そして、当大学将棋部の学生諸君らの協力も得て、このほど『楽園1号』と名付けた非常に優秀なマシンが完成し、とりわけ自動作図においては驚愕の能力を発揮することが確認されました。

本日、詰バラ入会申し込みと同時にお届け申し上げましたのは、その愛すべき楽園1号によって自動作図いたしました飛角図式三、三三七局。これをいわば私の名刺代わりとしてお届けする次第です。

これは楽園1号のきわめて高度な詰将棋知能回路によって検索された、盤上において可能なすべての飛角図式の中から、別詰順を生じる不完全作図と、それから詰将棋データベースに収録されている既発表の作品を除いた、未発表完全作の集大成です。もちろん、すべての図に正解手順と主要な変化紛れを併記してあります。

論理的に成立可能な飛角図式が、まだ盤上に三千局あまりも埋もれていたことを、多いとみるか少ないとみるかは個々の主観の相違でしょうが、いずれにせよこれは詰将棋の世界における歴史的発見と謳ってよいものでしょう。先に申し上げましたように、私は将

棋については超初心者ですし、詰将棋のほうもまだまだ未熟です。よって、ここにお届けした飛角図式のそれぞれの作品価値については、自分で判断できかねる部分が多々あります。

したがって、この中からどれを入選作品として掲載するかは、すべて水上編集長におまかせいたします。また、投稿作を詰将棋学校にするのか、デパートやヤン誌にするかなども一任いたします。そのさいの作者名は私の本名『陣内竜堂』でお願い致します。

なお、この飛角図式全発掘リストは、貴編集部のみならず、将棋世界・近代将棋・詰棋めいなどの各編集部にも同じものを配達証明付き速達書留で送付しております。

これら編集部へ配達確認された時点で、ごらんに入れた三千三百あまりの作品すべての著作権は、作者である私、陣内竜堂にあることを宣言いたします。

よって、配達日以降、すべての将棋詰将棋関連雑誌において、私の作品以外の飛角図式が選題されることはありえないはずで、もしも私の宣言を無視して他作家名の飛角図式を掲載した場合は、法的措置も辞さない所存で居りますので、その点お含みおきください。

また、上記四編集部と同時に作品を送ったのは決して多重投稿ではなく、いわば研究論文の送付とお考えください。そして、本リストから雑誌に掲載をお決めになった場合、それぞれの図面の右肩に作品番号が付いており、その、それをこちらまでご連絡ください、私のほうから他誌の編集部に速やかに連絡し、作者の責任において二重発表の危険を回避いたしますので。今回は、検索作業のやりやすい飛角図式という条件作に絞り込みましたが、裸玉の完全発掘作業も、私も楽園一号プロジェクトの重要な使命だと考えております。また、スタッフ一同の夢

は、論理的に可能な煙話の完全発掘と、順列七種合ニサイクルといったような人間の手ではほとんど創作不能と想われていた図面の埋蔵を捜し当てることです。さらには、「コンピュータによる詰将棋の作り方」という書籍の自費出版も予定しておりますので、あつかましいお願いではありますが、その節はバラ誌上での宣伝をたまわれれば幸いです。

では、今後とも新入会員の陣内をよろしく申し上げます。

詰棋界のアレクサンダー大王

陣内竜堂

■異分子の侵入はもう避けられない
いかがでしょうか。あなたはこうしたシミュレーションを、はたして非現実的なSF物語として一蹴できるでしょうか。

私は、脊尾詰や森田将棋は詰棋界の核爆弾だと思っています。これらソフ

トの開発によって、詰棋界は滅亡に至る禁断の扉を開けてしまった。

この核弾頭も、たとえば山田修司氏のように、詰将棋のすばらしさを熟知し、詰将棋に真の愛情を注げる人の手によって進化を遂げているうちはまだよいのです。しかし、実際の核弾頭がそうであるように、現代のアレクサンダー大王となるべく世界制覇に向けて暴走する倫理観なき独裁者に最高の武器を操られた日には、世界は滅亡の危機に直面します。

そして、詰棋界にそうしたタイプの異分子が混入してくることは、もはや避けられそうにありません。人並みはずれた明晰な頭脳と、コンピュータプログラムの開発にそぐ豊富な資金力と時間さえあれば、前述の陣内竜堂のような、詰将棋に愛情のひとつかけらも持たない人物が楽園を我が物顔に歩き回ることもきわめて容易なのです。

これまでコツコツと地道な努力を重

ねて創作に励んでこられた方にとって
は、とうてい容認しえないような未来
ですが、しかし、この未来は間違いな
くやってきます。

五〇〇号記念のおめでたい号に、お
まえはなんちゅうことを、と叱られそ
うですが、しかし五〇〇号から六〇〇
号への百号分の変化は、四〇〇号から
五〇〇号への百号分の変化とは較べも
のにならないくらいの加速度がつくは
ずです。

通巻六〇〇号記念号は、いまから八
年四ヵ月後の、二〇〇六年三月号にな
ります。このままいくと、六〇〇号記
念のバラは、ほとんどパソコンおたく
の同人誌みたいになっているおそれが
じゅうぶんあります。

読者サロンには、最新パソコン情報
や詰将棋ソフトの情報交換が満載とな
り、初入選の作家に『IBM男』とか
『富士通子』なんて名前が出てきたの
で、てつきりペンネームだと思ってい

たら、会員の所持するコンピュータそ
のものがたり……。

そして短評にしても、「初手の変化
がいきなり235手もかかるところが
素晴らしい。マシンも汗をかいていま
した。解図時間7分25秒 A」とか、
「百手超えの長編なのにパソコンに0
秒で解かれるようでは食い足りぬ C」
とか「最近の〇〇氏作は、なぜか底の
浅い作品ばかり。もしかして旧型マシ
ンで創作しているのでは？ なんだっ
たら、秋葉原でいい店紹介しますヨ。
こんどいっしょに行きませんか B」
なんてたぐいのオンパレードになりか
ねない。

去年のいまごろだったら、書きなが
ら冗談半分だと自分でも思っていたか
も知れませんが、500号を迎えた現
時点では、もうSFではありません。
通巻六〇〇号が出る二〇〇六年には、
まず間違いなくこういった状況が現実
のものとして訪れているだろうと、私

は確信を持っています。

■指将棋が無事でいられる真の理由

昨秋、伊藤果氏、島朗氏、森内俊之
氏、佐藤康光氏といった方々と食事の
卓を囲ませていただいたとき、一人の
将棋のアマチュアである私が、(将棋
棋士とは、インドを起源とする将棋の
奥底に隠された宇宙の真理を解き明か
すため、神が時空間を超えて日本に派
遣した人々であり、その棋士たちとコ
ンピュータとの共同作業によって将棋
は滅ぼされ、その滅亡によって初めて、
人類を操る驚くべき神の姿が明らかに
される)という、近未来将棋小説の骨
子を偉そうに語ってしまったのですが、
この小説は「沙羅の冠」というタイト
ルで、すでにその冒頭部分を角川書店
の小説誌に発表しました。

しかし、つづきが書けていないのは、
あまりにも詰将棋ソフトの進歩が早す
ぎで、空想世界の仮説がどんどん現実

レベルに引き戻されてしまい、作者として対応しきれなくなったからです。

そこで担当編集者と話し合った結果、しばらくは将棋ソフトの進歩の成り行きを見守ろうということで、続編は棚上げになったのです。

ところで、詰将棋がコンピュータの軍門に下るときはくるかもしれないが、指将棋がチェスのようにコンピュータに屈する日は永遠にこない、という考えが一般的になつていようです。

たとえば米長先生は、その確固たる信念の持ち主でいらつしやる。つい先日、の近代将棋誌上でも、コンピュータが解き明かせないのは日本の将棋と女の二つだとおっしゃっています。

しかし、米長先生はじめ日本将棋連盟関係者の皆々様から総スカンを食らうことを覚悟のうえで申し上げますが、チェスのようにプロ棋士対コンピュータの対決というものが、将棋界ではいまだ実現しないのは、将棋がチェスよ

りも段違いに複雑なゲームであるというだけの理由によるものではありません。もつと現実的な側面がある。

それは、コンピュータ・メーカーにとつて、プログラム開発のための研究資金の大量投下をしてまで対決を挑む世界的市場価値が、日本の将棋にはないからなのです。

ほーらね、棋士のみなさんをムツとさせちゃいましたよ。やめときゃよかったですすかね。こんなこと書くのは。

しかし、コンピュータ側の研究スタッフ、チェスの世界チャンピオンをなぜあそこまで追いつめることができるかといえ、たんにコンピュータは人智を越えられるかという夢の追求だけが動機になつていのではない。研究者にその夢の追求を許すだけの資金投下を会社側が許可をしているからです。

ではなぜそうした研究者の『道楽』にメーカーが乗るかといえ、欧米人のコンピュータユーザーにとつて、チ

ェスとは最大の知的遊戯だからです。だから巨額の賞金も含めたたいへんな費用を使つて対決イベントを組んだとしても、それは世界的宣伝効果を得られるので、出費に見合うだけの見返りがじゅうぶんにあるわけです。

そういう意味では、チェスはコンピュータの宣伝道具に使われたあげくに、その存在意義を無残にも弄ばれている、非常にあわれな状況にあるといえるでしょう。

ですから、いまのところ日本の将棋がそつとしておいてもらえているのは、大変に幸せなことと言わねばなりません。仮に、ビル・ゲイツが本気を出して「次の標的はシヨージだ」と号令をかけたなら、たちまちチェスの運命を後追いするのは間違いありません。

■悪夢の未来予測の根底にある体験

こうした予測を私がする根底には、フジサンケイグループにいたときのひ

とつの経験がベースになっています。

もう十数年前の話なので、企業秘密ではもはやありえないのでお話ししてよいと思いますが、一九八〇年代のなかば、当時フジサンケイグループでは、若き総帥・鹿内春雄氏に率いられるメディア軍団として、きたるべき新世紀の展望を放送、音楽、映像、出版、著作権管理等々、多岐にわたる分野において分析研究をする長期計画委員会というプロジェクトが組まれていました。

その中で、のちに棋聖戦の主催社である産経新聞社の社長になられる羽佐間重彰氏（現・産経新聞社会長）が座長を務める羽佐間分科会というのがあって、そこに私も加わっていました。この分科会は、音楽領域の近未来を分析するグループだったのですが、当時はちょうどCDソフトがポツポツと出回りはじめたところで、まだまだ音楽再生の主体はレコードだった時代です。

その会合には、グループ内の音楽産

業であるポニーキャニオンのスタッフも加わっていました。こうしたテレビ・ラジオ・レコードなどの専門家が集結しての分析でも、CDソフトへの全面転換時期を、なんと二年も遅く見積もってしまった。その誤算の理由はただひとつ、まさかソニーがCDプレイヤーの大胆な価格破壊を仕掛けてくるとは思っていなかったからです。

普及したから安くなる、ではなく、普及させるためにリスクを承知でハードの思いきった値下げを敢行したところに、ソニーならではの戦略があった。それがソフトの値下げにもつながり、誰もが予測しなかった猛スピードで、CDがレコードを駆逐してゆきました。そしてレコード店頭での品揃えの全面変更を機に、CDになじまないユーザーを主軸にした演歌系の楽曲があつというまに凋落していくという、関係者にとつては悪夢としかいいようのない激変が訪れたのです。

指将棋はひとまずおくとしても、いま詰将棋は、まさしくこのときの音楽ソフトと同じ立場にあります。つまりパソコンの価格が「ブレイクステーション」レベルまで下がるような事態が起きたとき、詰キストはなだれを打ってコンピュータソフトに頼りだし、それによつて創作や解答の概念が一変し、かつての演歌のように、流れについていけない人は、取り残されていく運命にある。そして、その時期はもうそこまで近づいてきているのです。

（※編集部と相談のうえ、今後しばらくの間、本欄を、詰将棋の未来及び現状の諸問題に関する活発な討論の場として開放することにしました。まずは本号のコンピュータ問題についてみなさんの自由なご意見をお寄せください。「毎日がパラダイス」係まで。締切はとくに設けず、随時本欄で紹介していきます。なお、来月提示するテーマは「やさしい作品は入選しないのか」